

〈時間の哲学〉

.....
ハイライト

- ・ 時間の哲学
 - ・ 各セミナー
 - ・ 国際シンポジウム
-

目次：

時間の哲学	1
お知らせ	2
イブニングセミナー／特別セミナー	
国際シンポジウム	3
所長室より	4
時間学ミニ辞典	4
【概日時計】	
編集後記／連絡先	4

時間学研究所ニューズレター新装第2号をお届けします。今回は青山先生の新刊の紹介、12月の国際シンポジウムの紹介を中心にお届けします。

時間は哲学の分野でも非常に重要なテーマです。今回は、山口大学時間学研究所の青山拓央准教授による〈時間の哲学〉の新刊を二冊紹介します。

『〈私〉の哲学を 哲学する』（講談社）は、永井均日本大学教授・入不二基義青山学院大学教授・上野修大阪大学教授および青山准教授による共著で、今年の10月に刊行されました。本書は2009年に大阪大学で開かれたシンポジウムをもとに書かれたものです。

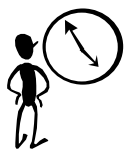
ニューズレター前号の「時間学ミニ辞典」にもあるように、「今」という言葉は「私」や「ここ」と同様、その言葉を使用した基点（時間・人物・場所）自体を指し示す指標詞です。そこで問題となってくるのは、客観的な今というものがあるかどうかでしょう。「私」や「ここ」に関してはふつう、客観的な唯一のものが存在するとは考えられていません。どの人物もその人物にとっては私であり、どの場所もその場所にとってはここだからです。

しかし、今に関して同じように考えることはできるでしょうか。つまり、どの時間もその時間から見れば今なのだから、客観的な唯一の今などない、というように。このように考えるなら、今の客観的な移行としての、時間の流れもないこととなります。私たちは西暦2010年が今であると――このニューズレターの発行時には――考えていますが、しかし、それは私たちがたまたま2010年にいるからであり、客観的には、西暦1010年も西暦3010年も、2010年とまったく同じように存在していることとなります。



このような考えは一見非常識に見えますが、じつは自然科学上の多くの理論と統合的なものです。これに対し、あくまでも今という特別な時点が存在すると考えるのであれば、たんなる指標詞ではない「今」とは何かを説明する必要があります。『〈私〉の哲学を 哲学する』では、「私」とは何かという問題とともに、こうした時間の問題を論じています。

もう一冊紹介をする本は、来年1月に刊行予定の『新版 タイムトラベルの哲学』（ちくま文庫）です。こちらは青山准教授の単著で、2002年に刊行された単行本（講談社）の文庫版ですが、ほぼ全体にわたって加筆・修正がなされています（表紙の画像は単行本のもの）。本書ではタイムトラベルを思考実験の素材にすることで、多種多様な時間の問題が考察されています。



イブニングセミナー

山口大学イブニングセミナーは、山口大学の研究活動を多くの方に知っていただくことを目指して2005年に始められ、これまでの4年間、東京・田町のキャンパス・イノベーションセンターで一般市民を対象に、多彩な講演会を開催してきました。

今年度のイブニングセミナーは平成22年10月22日、時間学研究所の主催で、『医学と美学の時間学』と題して医学系研究科の中村彰治先生と人文学部哲学・思想講座の田中均先生に講演を行っていただきました。

中村彰治先生の講演、「時間から見たストレスとうつ病の脳」では、ストレスが脳細胞の形を変えするという、いささか衝撃的な事実が紹介されました。長時間にわたるストレスは脳細胞を委縮させるという事実、そして記憶障害やうつ病の原因となる可能性が指摘され、一方で短時間のストレスは脳細胞の発達を促進し、記憶・学習能力を向上させるという研究結果が示されました。ストレスに強い脳をつくるためには日常的に適切に体を動かすことが必要というアドバイスもあり、参加者に強い関心を持たれたようです。



セミナーの様子

田中均先生の講演、「芸術における時間—現代演劇を中心に」では、現代演劇における演出方法の一例が、映像とともに紹介されました。それは、過去に起きた出来事を舞台上に再構成するのが通常の演技であるのに、その枠組みを超えて過去の出来事が現在の観客の目の前に出現するという斬新なもので、芸術と時間の関わり合いを再認識させる試みといえそうです。

特別セミナー

9月28日、産業医科大学公衆衛生学教室講師の久保達彦先生にお越しいただき、医学部総合研究棟にて「交代制勤務による健康影響」というタイトルでご講演いただきました。日本においては、昼夜交代の労働者が500万人程度存在すると考えられ、この労働形態による概日時計（24時間周期の体内時計）と生活リズムの慢性的なズレが、深刻な健康被害をもたらすことが知られています。

まず、昼夜交代勤務に従事すると労働者の身体にどのような影響が出るのか、とても解りやすく医学的にご説明いただきました。長期の従事者には、睡眠障害、うつ、肥満、高血圧、糖尿病、突然死、生理不順など広範の影響があるとのことでした。また、発がんへのリスク（特に、乳がんや前立腺がん）が高いことが疫学のみならずマウスの実験によってもわかっており、これらの報告に基づき、WHOの関連機関によって同労働形態の発がん性がハイリスク因子として分類、認識されています。

ただ、このような労働者の調査はいろいろな理由で再現性を得るのが難しく、解釈が判然としない点もご指摘されました。まず、企業側の精度の高い情報や協力体制が重要です。また、健康状態による労働者の入れ替え、勤続年数やシフト形態の違いなどが解析を難しくしています。簡易な概日時計測定法が開発されれば、より客観的で明確な解析も可能にな

ってくることも説明されていました。ただし、健康被害がいくら報告されても、労働者と経営者の間では利害関係が一致しているために、そもそも当事者がこのような問題を重要視していない点も解決すべき課題であることを指摘していました。

なお、本セミナーを通じて、時間学研究所スタッフとの共同体制によって、昼夜交代勤務の調査をスタートすることになりました。



講演中の久保達彦先生

時間学研究所設立 10 周年記念

時間学国際シンポジウム

体内時計と健康社会

本当は怖い生活リズムの乱れ 最先端研究者からの警告

山口大学時間学研究所の設立 10 周年を記念して、時間生物学の先端研究者を迎えた国際シンポジウムを開催します。多くの方のご来場をお待ちしています。

日時 2010 年 12 月 10 日（金）17 時～
会場 山口大学 霜仁会館（医学部）
入場 入場無料・予約不要

シンポジスト・講演

山口大学時間学研究所 教授

明石 真

「ここまでわかった体内時計のしくみ」

アメリカ：フロリダ州立大学医学部 准教授

Choogon Lee

「タイミングがすべて：生物時計のひみつ」

Timing is everything: The secret of the biological clock

スイス：チューリッヒ大学薬理学・毒性学研究所 教授

Steven Brown

「細胞学的手法によるヒト行動リズム研究」

A cellular approach to studying human daily behavior

労働安全衛生総合研究所 上席研究員

高橋 正也

「『変な』時間に働く人々の健康を守るために」

※山口大学の国際シンポジウムに先立ち、12 月 8 日に「時間学特別セミナー in 大阪大学」が開催されます。シンポジストは Choogon Lee、Steven Brown 両先生、コーディネーターは大阪大学大学院歯学研究科の中村渉准教授です。

主催 山口大学時間学研究所

共催 日本時間学会

協力 大阪大学大学院歯学研究科教育改革支援プログラム、大阪大学生命科学研究独立アプレンティスプログラム

お問い合わせ TEL 083-933-5848 メール jikann@yamaguchi-u.ac.jp <http://www.rits.yamaguchi-u.ac.jp/>



所長室より 「目標と戦略」

いま現在、時間学研究所が目標として掲げているのは、文理融合と世界的拠点化である。文理融合は、理系と文系の科学の融合なのであるが、専門化が激しい現状ではなかなか難しい。それからすると、世界的拠点化の方が少し楽かもしれない。というのは山大以外に時間を総合的に研究する機関が世界には他に存在しないからである。時間学の拠点化を図る上で一つの戦略性を要すると考えている。それは、われわれ日本社会に強烈な「時間を研究する問題意識の基盤があるか」である。実は、時間を研究対象として考えるには、時間に関する「内なる精神（エートス）」が必要だと考えている。それは、時間への限りない関心とある種の自信の存在とって良いかもしれない。

「内なる精神」の代表例を紹介しよう。それは、ユダヤ人のもつ時間意識である。近代になってユダヤ人は、多くの学者（芸術家や革命家もそうであるが）を輩出してきた。アインシュタイン、マルクス、フロイド、レヴィニストロース、ベルクソン、デリダ、ウィットゲンシュタイン、フロム、エリクソンなど、数えあげるときりがないほどである。私が専攻している社会学の領域でも、ほとんどの時間の社会学者が

ユダヤ人である。そして、ユダヤ人の著名学者たちのほとんどが、時間の視点への関心を示し、その時間領域で大きな功績を残しているのである。私には、ユダヤ人の学者に「パラダイム革新」(T.クーン)を生む業績が多くみられた背景には、彼らの時間に関するエートスが関わっているように思われる。なぜこれほどまでにユダヤ人が貢献しているのかは、彼らの置かれた民族的経験（ディアスポラ）と彼らの選民的な誇りが関係していると思うが、いまわれわれが使っている暦の1週間にあたる七曜も、実は、彼らが『旧約聖書』によって普及させたものである。

こうしたユダヤ人のエートスを日本人と比較すると、残念ながら、われわれ日本人はそこまで強烈な時間意識への関心をもっていないのではないかと思う。ただし、決して、日本人に時間意識がないわけではない。西欧的な時間意識とは違う、四季の季節感や自然の花鳥風月などの変化を審美的に見つめ、楽しむところの時間意識がある。しかも、これは、アジアに連なる時間意識とって良いかもしれない。1970年代頃近代化の反省からアジア世界が注目された。いま中国を中心としたアジアに注目が集まる時代になった。そのアジアから出発することは大事とだと思うが、どうだろうか。

(辻正二)

時間学ミニ辞典

【概日時計】

体内時計とは文字通り身体に備わる時計のことである。時計であるから、外界（体外もしくは体内環境）による時間情報が必要とせず、例えば隔離された環境においても、自動的・自律的にリズムを刻み振動することができる。心臓の拍動のように周期が非常に短いものも相当するが、多くの時間生物学者が注目し解析する体内時計は、約一日を計る時計である「概日時計（Circadian clock）」の研究である。

なぜ生物はこのような体内システムを必要としているのだろうか。おそらく、生物は太陽サイクルに適応して生きるために、概日時計を進化的に獲得そして維持してきたと考えられる。概日時計は、バクテリアなどの単細胞生物にも存在しており、地球上で生きるための基本的な生命機能であることがうかがえる。では、どのようなメリットがあるのか。生物は本来太陽の日周サイクルに合わせて生活せざるを得ないが、そうすると行動生理活動には一日長の周期性が生まれる。この際、もしも自律性を持つ時計によって、このリズムに合わせた体機能の準備ができれば、生存にも多いに有利に働くことは想像に難しくない。例えば、食事に備えて消化管機能を高め、日中の運動に備えて体温・血圧の上昇を行う。狩りで獲物を捕獲しなくてはいけないのに、血圧も体温も低ければ

目の前の折角の獲物も逃がしてしまうだろう。各臓器で発現リズムをもつ遺伝子は数百にも及んでおり、概日時計がうみだす生体リズムは多岐に渡る。ところが、人類はこの百年足らずで24時間社会をつくり上げた。進化による環境適応を遥かに超えたスピードである。現代人は太陽と無関係に生活をしているために、概日時計によってプログラムされた体機能リズムは空回りをする事になり、様々な体調不良および疾患の原因となる。例えば、睡眠障害・高血圧・肥満・高脂血症・糖尿病・動脈硬化・消化器疾患・精神疾患・生理不順・流産などのリスクが高まる。最近では、昼夜交代勤務による発がんリスクがWHO 関連機関によってG2Aにランクされて注目されている。

(明石真 時間学研究所)

《編集後記》ニュースレター原稿募集中！（責任編集 K.F.）

《時間学研究所 連絡先》

〒753-8511 山口県山口市吉田 1677-1

山口大学 総合研究棟

TEL/FAX 083-933-5848

メール jikann@yamaguchi-u.ac.jp

<http://www.rits.yamaguchi-u.ac.jp/>

